

小原克博著 『神のドラマトゥルギー - 自然・宗教・歴史・身体を舞台とした - 』  
( B 6 ・ 2 1 0 頁 ・ 2 5 0 0 円 [ 本 体 ] + 税 ・ 教 文 館 )

芦名定道

本書は、小原克博氏が、氏の博士学位論文（一九九六年）をもとに、その後の研究成果を加えて書き上げた待望の研究書である。氏は現在の我が国におけるキリスト教思想研究で最も活躍している若手研究者の一人であり、このような形で、氏の神学思想が公にされたことに、同じキリスト教思想研究に携わっている友人の一人として、まず心からの賛辞を送りたい。

本書の全体構想は、その表題に凝縮的に示されている。神の自己啓示を神の演じるドラマと捉え、このドラマが人間によっていかに経験され認識されるのかを、自然、宗教、歴史、身体という舞台において叙述するのが、本書の目的である。このため、氏は現代ドイツの代表的神学者パネンベルクの思想を緻密に分析し（第一部）、パネンベルクとの対論を軸に、神学を取り巻く広範な問題領域を縦横に論じて行く（第二部）。紹介すべき点は多々あるが、以下、第一部のパネンベルク論と第二部の神学的身体論にしばって、氏の議論を紹介することにしよう。

小原氏は、パネンベルクの神学的思索の出発点と言える共編書『歴史としての啓示』に収められた論文と、その神学研究の集大成である『組織神学』（全三巻）に考察を集中し、そこから、人間の経験を可能にする「現実の総体性」と「一切の現実を支配する神」というパネンベルク神学の核心を構成する中心概念を明らかにする。これらの概念は、神学と哲学の対論や自然神学の成立を可能にする基盤であって、小原氏は、本来、自然神学は「それによって神の存在証明を不当に要求している」のではなく、むしろ神学が、世俗化以降の時代状況の中で、自己閉塞的にならないために必要な神学以外のものとの「『議論』が成立する場」であることを説得的に論じている。これはバルトラによる従来のキリスト教神学の問題点を克服する試みであり、パネンベルク神学の中心的主張であると共に、小原氏自身の神学的主張に他ならない。現代の時代状況において、神が認識される場は、現実の総体性という概念が示唆するように、自然神学が扱う「自然」の領域にとどまらない。小原氏は、「自然」に続いて、諸宗教における宗教経験、神話、そして歴史といった神が演じ人間が経験する舞台を一つ一つ叙述してゆき、「キリスト教神学をその全体性において把握」しようとする。「神のドラマトゥルギー」は、歴史における間接的啓示や終末論を経て、三位一体論まで迎えられることにより、その全体が締めくくられる。パネンベルクの抽象度の高い神学の全体像は、小原氏の卓越した分析を通して、ここにその現代的意義が明確化されたと言えよう。

第二部において、パネンベルクを通して獲得された神学的思索は、現代の生命や環境をめぐる神学的議論へと大きく展開され、「神のドラマトゥルギー」は、「身体」へと舞台が移される。読者は、ここにおいて、最新のキリスト教思想の最も重要な議論を確認すると共に、小原氏の神学的思索の豊かな可能性を見ることができよう。とくに、氏が最後に論じている「人格概念や偶有的責任」の問題は、自己が制御可能な領域の外部から自己に課せられる責任性（たとえば、宗教的な召命体験において経験される偶然に選ばれたことによって成立する責任）を論じるものであり、自己決定権が強調される現代の思想

状況に対して、大きな問題提起と言える。

本書で小原氏が繰り返し参照するパネンベルクはモルトマンと共に現代ドイツ神学をリードする思想家であるが、その重要性にもかかわらず、我が国ではいまだそれに見合った評価がなされていないように思われる。本書をもとにして、パネンベルクを中心とした現代神学をめぐる討論が今後活発に行われることを期待したい。しかしまた、本書は単なるパネンベルク紹介にとどまらない。これまで神学に関心のなかった人でも、小原氏の議論をたどることによって、神学するおもしろさとその意義を実感できるのではないだろうか。現代の生きた思想としての神学に興味のある人に、ぜひ一読をお勧めしたい。

(あしな・さだみち = 京都大学助教授)